# 東京大空襲を乗り越えて

福田勇　鹿沼市

それは誠に、この世のものとも思えない、地獄もこれほどひどいものであろうはずがない、と思うほどの光景でした。

昭和20年、3月9日、夜11時20分頃、深川平野町木場二丁目で警戒警報が響き、すぐ空襲警報に変わりました。

防火ホースを引き出し、消火の準備をしようとして暗い夜空を見上げると、今までは9千㍍くらいの高度でしか見ていなかった米軍のB29の大編隊が低空で市街方面に向かっていく。やがてあちらこちらが燃え上がった。大通りへ逃げなければだめだと思い、急いで勤め先の主人の子どもたち（中学生、小学生）、女中さんと5人でヘルメット、防寒服をまとい駆けだした。火がどんどん追ってくるので、千葉県市川市の方面へ逃げようと、皆かたまってかけていくが、火の粉がひどく、防空壕で火をよけながら進んでいくうちに、皆ちりぢりになってしまった。

仕方なく一人で逃げるが、ボール玉ぐらいの火の粉が強風で真横から襲ってくる。落ちていた布団をかぶり逃げ進んだが、火の粉の勢いが強く、布団をしっかりつかんでいないと、ものすごい強風で飛ばされそうになる。しっかりつかんでいなければだめだ、がんばれ、長男じゃないか。一瞬、頭に母、祖母、弟妹、父の顔がひらめいた。しかし、布団はまるで新聞紙のように飛んでしまった。

風の強い夜だったが、火の勢いでなお加速される。少しの間地面に手を着き、じっとしていたところ、若い男の声が耳に入る。「しっかりしろ」と聞こえた。上野方面から逃げてきたというその男と2人で助け合って、何とか千葉方面へ逃げようと進んでいく。菊川橋を渡り前方を見ると、道いっぱいになって大勢の人たちがこちらに向かって逃げてくるではないか。遠くを見ると火の海になっている。

これではだめだ、進めない！　それなら橋の上で様子を見て川へ飛び込もう、と決して靴を片方脱いだ。しかし、もし助かった場合、裸足ではまずいと思い、靴を履きなおし、編み上げ靴のひもをまた縛り直した。

川の面をよく見ると、材木を束ねた筏が見える。下町の川などは木場の材木屋の筏が多くある。よし、筏の上に飛ぼう。しかし下過ぎる。そこで何とかひもを見つけ、その辺からいろいろなひもを見つけ、つないで欄干からつるし、なんとか筏に降りた。そのたった1本のひもだったが、後から後からものすごい多数の人たちが降りてきた。

筏の上にも火の粉が舞い落ちる。かぶっていたヘルメットで水をすくい、コートにかけて火を防いだ。

大きな筏であったが、なにしろ大勢なので筏が沈みかける。橋の上では火の粉が吹き付けているのだろう、人々が川に飛び込む。大勢の人が泳いでいるが、だんだん沈み、頭だけ見え、やがて手だけがもがいて沈んでいく。が、どうしようもない！　そのうちに人の重みで筏もだんだん沈んできた。橋げたの内側にあるいろいろな鉄管の一つにつかまり頑張る。大勢つかまる。寒さも襲う。

私は19歳、若かった。声を大にして叫んだ。「皆さん、歌を歌おう」軍歌を叫んだ。いろいろな軍歌、応援歌を歌い寒さと戦った。

どのくらいの時間が過ぎたのだろう。時計などない。やがてうっすらと夜が明けてきた。夜明けだ。建物は燃え切ったのだろうか、火の粉はない。岸のコンクリートの土手に登ろうと手をかけるが、体が、特に足が上がらない。下から押し上げてもらい、やっと岸に上がった。

家屋、建造物が全部猛火でなくなってしまっていた。残り火で生き残った人が暖まっていた。私もしばらく暖まってから、菊川橋を渡ろうとした。が、何という光景だろう…　橋上一面に焼死体。足を踏み入れる場所がない。衣類は全部焼けて素裸、いや黒こげの肌、もしくは赤色の肌。下向き

の死体、上向きの死体。目を背ける。
平野町の工場へ戻ろうと思った。深川三ツ目通りを歩く。大きな男の死体が四つん這いになって手をつき、頭を少し上げた形で黒焦げ。両国に近いから、たぶん大関鏡里だろうか。また1㍍四方くらいのコンクリートの防火用水の中に、母親が赤ちゃんを抱いて倒れ掛かった姿を見る。何とも哀れになる。
やっと平野町工場跡地（焼野原）へ着く。焼け跡に工場の仲間や弟がいた。おお、お前たち無事だったか、良かった。良かった。遅いので心配していたと、皆で喜び合う！　ともかく、すっかり焼けて何もなくなっていた。
栃木に向かうことにした。栃木市に山岸工業の疎開工場があるからだ。浅草雷門に向かう。着いてみると東武電車は不通。南千住から動いているという。また歩く。空腹は我慢できるが、口が渇く。壊れた水道の水を見つけてほっとする。南千住に着く。電車ではなく貨物車に乗り、栃木駅に着いた。工場に着いて社長夫妻に子供さんたちを渡すことができた。大変喜んで労をねぎらって下さった。そして懐かしの故郷、鹿沼へ、夕方やっと着いた。母や家族たちが大変喜ぶ。風呂へ入りたいと言ったが、夜はB29が恐ろしいから、明るい時でないとだめ、と言われた。ガッカリしたが、空腹を満たし、とにかくどうにか落ち着いた。そして3月10日は終わった。
私は4月から鹿沼で過ごしたが、20年7月12日宇都宮大空襲の時、鹿沼の一部、泉町、文化橋、戸張町三町内の一部が焼けた。私の家も、隣の貸家ともどもすっかり焼けてしまう。

●鹿沼（上都賀郡鹿沼町）の空襲（昭和20年7月12日）

昭和20年3月10日、東京大空襲で下町一帯、約十万人が亡くなった地獄さながらの光景。墨田区立川町菊川橋だけでも六千人の方々が犠牲になった無差別爆撃から4か月たった7月12日、鹿沼でも焼夷弾が投下されて文化橋町、泉町、戸張町、三町内の一部が燃え始めた。
みんな坂田山の下、現在ボウリング場があるところの近くの大きな防空壕へ逃げた。
鹿沼町消防車は援軍で宇都宮へ向かってしまい、焼けるに任せるばかり。私の家も隣家の家も燃え上がる。
私（19歳）と弟（17歳）は東京空襲での生き残り、慣れている。焼夷弾は直撃されなければ平気だ。逃げないでバケツと、荒縄を長い棒につけた火はたきをもって、道一つ離れた近所の家々の消火に懸命になる。空地、庭、道路での焼夷弾の火はかまわずに、軒下、羽目板を夢中で消し歩く。道路でへだてた建物はくすぶったが、どうにか消火した。しかし、戸張町に住んでいた近所の一家は自分の家に作った防空壕の中で6人全員亡くなってしまう！　小さな防空壕なので熱を防げなかったようだ。ご冥福を祈り文を終わります。

後記（平成27年8月10日）

昭和20年から43年過ぎ、平成元年1月末日年号が改まる。東京大空襲の一夜を過ごしたあの菊川橋に行きたい、どのようになっているのか。あの多数の亡くなった人々の冥福を祈ろうと、東京、立川菊川町へ向かう。
国電を降りて、途中の店で線香を買っていこうとしたら、「橋の所にお線香はありますよ」とのこと。行ってみると、立派なお堂がある。大きな記念碑、赤い色の幟が何本も立っている。御影石の碑に「夢違の地蔵」と、20年3月10日の出来事が記してある。なんとこの場所で六千人もの人々が亡くなったとのこと。3月10日の空襲で約十万人が死亡したと記録してあった。
お参りをしていると、黒色の自動車から老紳士が降りてきて声をかけられる。頂いた名刺には吉野弥太郎との名前。吉野さんが中心となって戦後多数の方々で立派なお地蔵様を作り上げたとのこと。吉野さんの従業員さんの運転で、近くの大きな屋敷、そして工場へ行く。庭に千人くらいは入れる大きな地下空間があり、非常のときの用意だそうです。感心していると、栃木県にはプラス

チックの工場が３か所、栃木市、小川町。米国シカゴに１か所「ヨシノ」がある、とのことです。

その後、私が働いていた深川二丁目平野町の工場跡地まで自動車で送っていただきました。厚くお礼を述べ別れました。「夢違いの地蔵」は仲間の方々が管理、運営しているとのこと。鹿沼に戻り、少しばかりの運営金を送付いたしました。

平成27年８月10日。戦争のない、平和な日本で毎日を過ごせる幸せ。これからも長く願いながら。　福田　勇（89歳）記す

**夢違地蔵尊縁起**

一九二三年（大正十二年）関東大震災に於ける下町の惨禍は遭難死者五万八千名に及びその遺骨を収納し、東京都慰霊堂が建立され、その加護と平安を願い毎年九月一日を記念日と定め　官民あげて法要が営まれているが、この地も焦土と化しその物故者も多いため、毎年その慰霊法要を行うに至った。一九四一年（昭和十六年）太平洋戦争勃発し、戦局利にあらず、殊に一九四五年（昭和二十年）三月九日より十日にかけての米戦略爆撃機B29による東京空襲は最も熾烈を極め僅か数時間で下町を中心に二十七万八千余戸を焼失し無慮七万八千余の殉難者を出した広島　長崎の原爆の戦史に比類する永遠に忘れ得ぬ悲惨な史実である。

まだ春浅き三月九日夜半　雨あられの如く投下された焼夷弾は、いとまなき出火となり立ち向かう術もなく、劫火の中を、親は子を子は親を、呼び合い叫び逃げまどい　或は壕に入り、水面に飛込み、或は公園、校舎に走り、ついに力尽きてその声も消え果て、やがて倒れ重なりまっ黒な焼身と化し、水に入りては沈泥に骸と果て、翌朝光の中の惨状は眼を覆うばかりであった。生き残れる者僅かにしてそのさまは亡者のようであった。この地の殉難者数約三千余名といわれている。

この地蔵尊の在わします菊川橋周辺の惨禍は、東京大空襲を語るとき後世まで残るもので霊地として守らねばならない聖域である。而して復興なり一九八三年（昭和五十八年）三月十日、誠心集い浄財を集め仏縁深き弥勒寺住職の教示を得て、これか悪夢の消滅を願い、これを善夢に導き、再びこの悲史をくり返さないようにと、夢違之地蔵尊と命名され開眼法要、殉難者追悼供養を施行した。

時移り再び多大なる協賛を得て夢違之地蔵尊縁起の史碑建立となり地蔵講が生まれた。願わくば子々孫々への加護と人類の平和を祈念して本日此処に慰霊法要を謹んで行うものである。

合掌

一九八五年三月十日　弥勒寺第五十七代住職　岩堀真至謹書　夢違之地蔵尊縁起史碑建立　協賛者一同

夢違地蔵尊
東京都墨田区菊川 3-13-2（都営地下鉄　菊川駅　徒歩５分）